

年間第十七主日

2013.7.28

ルカ：11・1-13

私たちが慣れ親しんでいる「主のいのり」は、福音書の二つの箇所、別々の形で伝えられています。一つは、マタイ福音書6章9節から13節の、いわゆる、山上の説教の中にあるもので、私たちが今唱えている「主のいのり」は、マタイ福音書に伝えられている「主のいのり」のことばに基づいています。それに比べると、今日の福音のルカ11章2節から4節の「主の祈りは」は短すぎて、素っ気なく感じられるかもしれません。けれども、ルカ福音書がこの「主のいのり」を紹介するに当たって、今日の福音で述べていることは、「主の祈り」を理解する上でとても大切なことを語っているように思えます。

マタイ福音書では、施しや断食に並んで祈りについて教える文脈の中で、あなたがたは祈る時にはこのように祈りなさいと言われて、イエスは「主の祈り」を教えておられます。祈りや施しや断食は、神の御心に従って生きようとする人々が進んで行くべき、旧約の時代から大切にされて来た伝統的な信心のわざです。イエスがご自分に従う弟子たちに求めておられることは、そのような神への信仰によって進んで行く善いわざにおいても、外面的なことに流れることなく、心から神と向き合うことです。「祈る時には、奥まった自分の部屋に入って、戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。」という御ことばは、そのようなことを意味しています。私たちが願う前から、私たちの心にある全てを知っていてくださる父なる神に、信頼そのものとなって祈るとするならば、異邦人のするように、くどくどと言葉数多く祈る必要はない。この祈りの中に、あなたたちの願うべきことは全て尽くされている。そのような思いを込めてイエスはこの「主のいのり」を教えてくださいました。山上の説教のこの主の御ことばを受けて、イエスの弟子たちから始まった教会が、マタイ福音書のこの主の祈りを唱え続けて来たことはふさわしいことだと言えます。

一方、今日の福音のルカ11章では、「主のいのり」に先立って、祈っておられるイエスのお姿が示されています。「私たちにも祈りを教えてください」と願った弟子ならずとも、イエスの祈るお姿に接したならば、誰でもこのように願いたくなるのではないかと思います。事実、私たちも尊敬する、あるいは心を寄せる誰かが、一人静かに祈っている姿に接するならば、何を祈っていたか聞いてみたくなる衝動を感じます。ルカ福音書の「主のいのり」は、イエスの弟子

とイエスとのそのような心の交流の中で、イエスが教えてくださった祈りです。この「主の祈り」によってイエスはご自分の御父への祈りを私たちと分かち合ってください、イエスが生きられた御父とのいのちの交わりの中に、私たちを招き入れてくださるのです。ルカ福音書の文脈においては、「主のいのり」はイエスが私たちに教えてくださった祈りであるより前に、イエス御自身の御父への祈りであり、その祈りの中にイエスは私たちを招き入れてくださるのです。だから、ルカ福音書の「主のいのり」は「父よ、」という直接的な呼びかけで始められるのです。「神の子」であるイエス以外に誰も、神に向かってこのように呼びかけることが出来る者はいません。この「主のいのり」へと私たちを招き入れてくださることによって、イエスは「神の子」としてのそのいのちの神秘の中に私たちを招き入れようとしていてくださるのです。私たちはイエスが教えてくださったこの「主のいのり」を唱えることによって、イエスのいのちに結ばれ、父である神の子らとされて、イエスとともに「父よ」と祈る者たちとなるのです。

「主のいのり」はイエスに教えていただいたイエスご自身の祈りであることによって、私たちになじみ深いその祈りの一つ一つの願いのことばもより深い意味を持って響いてくるように思えます。「み名が崇められますように。み国が来ますように」との願いは、神の子として私たちの世界に来てくださったイエスはその生涯をかけて、私たちのこの世界にもたらそうとされたことの実現を願う祈りです。私たちはイエスとともにその実現を願うよう招かれているのです。父なる神のみ名が全ての人に崇められ、父なる神のみ国が、私たちのこの世界に到来する時、私たちの願うべきことは全て聞き届けられたことになるのです。

「私たちに必要な糧を毎日与えてください」との願いは、私たちの地上の生を養うための物質的な糧もさることながら、「人はパンだけで生きるのではない」と言われるイエスの祈りは、何よりも私たちの人間としての飢えを満たすに足る父なる神のみことばに養われることを求める祈りです。真実この祈りにおいてイエスと結ばれて、父なる神の御旨の実現を祈る時、私たちは、明日の糧への不安に脅かされる生活の中であって、それから解放されて、人間らしく、神の子として生きることが出来るのです。

「私たちの罪をゆるしてください」との願いは、私たち全ての者の罪を一身に背負って十字架につけられたイエスの、十字架上からの父なる神への叫びです。そのイエスの祈りに結ばれて、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい」との招きに応える時、私たちはイエスとともに、世の全ての罪のゆるしを願って、「私たちの罪をゆるし

てください」と父なる神に祈ることが出来るのです。そしてそのように祈ることによって、私たちは自分の罪から解放されてゆくのです。そのようにいのりを真実祈ることが出来る時、私たちにとってゆるすことのできないお互いどうしの負い目などはなくなっているはずです。

「主のいのり」はその中に私たちが願うべきことの全てが込められた、これ以上はことばを要しない、イエスご自身が示してくださった完全な祈りです。必要なことは、「主のいのり」のあとでイエスが言われているように、諦めずに祈り続けることです。「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる」。イエスのこのことばに励まされて、祈り続けたいと思います。イエスがそうされたように、あの十字架の極致に至るまで祈り続けることが必要なのです。イエスが教えてくださったように祈り続けることによって、私たちは、イエスが生きられたように父なる神の子として、父なる神のみ手の中に生きることが出来るのです。

イエスが、いわば口移しに教えてくださったこの「主のいのり」を祈ることによって、この祈りを生きられたイエスの中に働いておられた聖霊が、私たちにも分け与えられ、ついには、私たち一人ひとりの願いの祈りを越えて、どのようなことが私たちの行く手に待ち受けていようとも、十字架の死を越えて復活されたイエスとともに、聖霊のうちに、父なる神を賛美する恵みを願ってまいりたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高